



# スイの魔法 3

α L P α α L I G H T

白神怜司

*Shirakami Reiji*

アルファライト文庫 

### ユーリ

（ほろ）<sup>SA</sup>（おん）  
滅びし山間の部族の  
姫であり、  
高い魔力を誇る。  
ア rilタに忠誠を  
誓っている。

### ネルティエ・ グライエス

「魔術科」で、もともと実力がある生徒。他人にも自分にも  
厳しい完璧主義者。  
ルスティアとは  
幼馴染。

### ルスティア・ フェズリー

「魔術科」にやってきた  
転入生。爽やかな  
美少年。いつも笑顔で  
浮かべている。

### ア rilタ・ ブレインル・メトワ

リブテア大陸全土を支配する  
ブレインル帝国の三代目帝王。  
「狂王」として畏れられている。

### アンビー・ ニュタル

ヴェルディア魔法学園の卒業  
生で、魔導具開発の研究者。  
いつも飄々としており、  
口癖は「へッス」。

### ファラ

伝説の金龍にして、  
スイの忠実な（使い魔）。  
魔法訓練の  
良き相手。

### スイ

（みづは）<sup>つめ</sup>（めい）  
主人公。銀髪蒼眼の孤児。  
十一歳。容姿・知性・  
魔力を備えた天才だが、  
超マイペース。

### アーシャ

スイと同じ銀髪蒼眼の美少女。  
かつては世界を恐怖に陥れた  
魔導兵器だった。

## フロローグ

ヴェルディア大陸を統べる大国ヴェルディア王国。その王都ヴェルにある、とある建物の中。

無骨な階段の先にある真つ暗な地下室の中央に、音もなく直径約二メートルの魔法陣が現れ、煌々と白い光を放ち始めた。

白い光は次第に強くなり、薄暗い室内を一際明るく染めると、やがて収束していく。光が完全に消えても、部屋はほのかに明るさを残していた。壁にかけられた燭台に、いつの間にか炎が灯っていたからだ。炎は風に吹かれたかのごとく一度激しく燃え上がると、直後には何事もなかったかのように鎮まり、ゆらゆらと揺れた。

炎が照らし出した魔法陣の中央。そこに、年の頃は十代前半といった風貌の少女が丸い眼鏡をかけ、桃色の髪を揺らし立っていた。

少女は「ふむ」と小さくため息を吐き、自分の身体を見て不満気な顔になり、中指と親指を擦って、パチンと指を鳴らす。すると、少女の頭上に魔法陣が現れ、その身体を覆うように光のヴェールが垂れ下がった。それが足元まで届くと、一瞬眩い光を放ってヴェールは消え去る。

「……確か、年齢的にはこんなもんだったね」

今しがた光に包まれた少女は、今度は十代後半の女性の姿に成り代わっていた。

自分の身体を改めて見た女性——アンビーは満足気に頷くと、トンと地面を靴のつま先で叩いた。彼女の正面に光が集まり、やがて人の形を成していく。召喚光——スイの〈使い魔〉であるファラが自らの意思で姿を現す際に放つ光に似たそれが、アンビーの正面に現れる。

光はくつきりと輪郭を描いた後、バサツと鳥が羽を広げるような音とともに、霧散した。そこに姿を現したのは、二十代半ばと思しき美しい女性だ。淡い青を纏い、長く白い髪を頭頂部で左右に分けている。

先ほどの鳥が羽ばたいたような音は、その美しい女性の背にある左右三対——六枚の白い翼を広げた音だった。翼を持つ女性の姿はさながら絵画に描かれた天使のようである。事実、彼女は『天魔』——悪魔と天使の総称——の一翼を担う天使であった。

「我が主様、お呼びになりましたか？」

微笑を湛え、天使が尋ねる。『我が主様』という言葉はアンビーに向けられていた。まさしく彼女は、アンビーの〈使い魔〉であった。糸を紡ぐように囁かれた声は柔らかく、人が抱くどんな警戒心もすっかり洗い流してしまっただろう。

〈使い魔〉は、静謐なオーラを放っていた。白い布地のドレスは胸元が大きく開き、たおやかな膨らみを覗かせる。ドレスは足元に届く長さで、純白のきめ細かな肌を包み込んでいた。男性ならば思わず生唾を呑み込み、女性であっても、見とれてため息を漏らしてしまいかもしれない。それほど美しさだ。

しかし、〈使い魔〉を喚び出したアンビーは見慣れているので気にもとめない。そして、ただ淡々と告げる。

「……メルメル、トワがこの街に来たみたい」

メルメル、と呼ばれた天使は穏やかな微笑を浮かべ、閉じていた顔を上げて、灰色の瞳をわずかに覗かせると、すぐまた顔を下ろし、笑みを深めて言った。

「トワがやって来たのですか、我が主様。最後に彼女と会ったのは、もう数百年ほど前——彼女が造られたあの日以来ですわね」

「そうなるね。金龍と銀をけししかけた甲斐があった、ということかな」

「まあ……。人間が悪いですわ、我が主様」

「人間きも何も、ここには私とキミしかいない。気にすることもなからうよ」  
頬を膨らませたメルメルに向かつて、アンビーが肩をすくめて答える。飄々とした主の姿に、メルメルは「相変わらず困ったお方ですこと」と咬き、ため息を零した。

「——それで、我が主様。トワをどうなさるおつもりで？」

「どうってッ！」

「役目を失った人形を、破壊なさるのですか？」

「……ふむ。彼女は確かに、役目を全うできなかつた。不本意なことではあつただらうけれど、いずれにせよ、回収する必要がある。あの子の中にある『宝玉』を抜き取る必要もあるしね」

あつさりと言ビーは言い放つ。その言葉には悪意や憎悪といった感情はなく、淡々と事実のみを口にしてるといった感じであつた。

「……そうですか。異論はありません。我が主——『断崖の魔女』様」

「よしてくれ。その名で呼ばれたのは遙か遠い昔、古い時間の中だけの話さ」

——そのとき、王都ヴェルの最北端に位置する王城では。

ヴェルデア王国の若き国王、乱れた茶髪と無精髭のバレン・ナイザス（ちなみに茶色い瞳）。そして、国王と同じく三十代に差し掛かるかどうかといったところの若き侯爵家当主、髪をきつちりとオールバックに纏めたアーヴェン・フェルトリート。この対照的な二人が国王の政務室の椅子に腰掛け、顔を突き合わせていた。

「——まったく、さすがは『狂王』といったところだな」

感心か、あるいは呆れか、どちらとも取れる言葉を口にし、バレンは二人の間に置かれている木の机の上に手紙を放り投げた。

二人が顔を合わせる理由となつたその手紙は、ブレイニル帝国の『狂王』こと、アリルタ・ブレイニル・メトワが、アーヴェンに持たせた手紙である。

毎年末、中空の魔素が様々な環境条件が重なって作用し合うことで、空に光のカーテンが現れる。『光夜』と呼ばれる現象だ。ヴェルでは、これを一年の締め括りとして『光夜祭』という祭りが行われる。

およそ五ヶ月前——つまりは昨年末。

祭りで賑わうヴェルに、ブレイニル帝国の急襲部隊が出現した。彼らは街に混乱を招き、

スイを拐かした。

このブレイニル帝国の脅威によって、ヴェルデア王国はアルドヴァルド王国と同盟を結ぶことになる。そして、この同盟を武器に、ブレイニル帝国へ不可侵条約の交渉のために渡ったのが、アーヴェンだった。さらに、彼には囚われてるスイの状況を探るという任務もあった。

結論から言えば、アリルタから直接情報を得ることで、スイの動向を探ることに成功した。しかし、不可侵条約の交渉は決裂に終わった。アリルタが、アーヴェンと同行していたアルドヴァルドの使者を愚弄することで、両国の脆弱な同盟関係を、その場で引き裂いてしまったためだ。

そればかりか女帝は、その場でヴェルデア王国とブレイニル帝国の新たな同盟の話まで匂わせたのである。その際にアーヴェンに持たせたのが、件の手紙であった。

アーヴェンもその手紙の内容は気になっていたが、密書ともなれば容易に中身を覗き見することはできなかった。とは言え、ある程度の予想はついていたが。

——今思い出しても、かの女帝は賢王と呼ぶに相応しい。

アーヴェンはアリルタをそう評している。傲慢で苛烈な態度、アルドヴァルド王国の使者に対する物言いなどを相殺してもなお上回るだけのカリスマ性がアリルタには備わって

いた。

そんな印象を鮮明に思い出しつつ、自らの予想を確認する意味合いも兼ねてアーヴェンが口を開いた。

「手紙には何と？」

「昨年末の『光夜祭』にスイを拐かしたことへの謝罪。それだけならまだしも、アルドヴァルドとの同盟を破棄しブレイニル帝国と組まないか、という提案だ。それに加え、ご丁寧にも我が国の警備態勢の弱点、欠点なども挙げている。無礼だ、と言いつ返してやりたいが、あながち否定でさん内容だから腹立たしい限り。だが何より——」

鼻息も荒く、押し出すような勢いで答えたバレンは、盛大なため息を吐き出し、言葉を区切った。

「——詳しい話は書面ではできないし面倒だそう。向こうが足を運ぶか、こちらが帝都ガザントールまで赴くか、どちらでも構わないが直接話したい、と書いてある」

——言ってくれるではないか、小生意気な帝王めが。呆れてものが言えない。

顔にそうありありと書いてあるバレンだが、どこか愉しげな表情でもある。そして、ついに堪え切れなくなったのか、笑いを漏らした。

「クツ、ククツ……。なあ、アーヴェンよ。お前は『狂王』をどう見ている？」  
質問の意図はいまいち理解し難いものであったが、アーヴェンはただ感じたままを口に  
する。

「かの帝王には、くだらない戯言や世辞は一切通用しない。獣が獲物に食らいつくように、  
追求する何かに向かってただ突き進む貪欲さ、鋭さを感じられたのでな。そうさな、敵に  
すれば最大の敵となるだろうし、味方につけても背後から食い破られかねない、といった  
ところか」

「……ほう？ 奇遇だな。それは若い頃の俺がよく言われていたことだ」

「奇遇なものか。あの女帝は昔のお前とよく似ている。刀が鞘を得たか、抜身のままかと  
いう違いがあるだけかもしれん」

アーヴェンの歯に衣着せぬ物言いにバレンは盛大に笑い声をあげると、「なるほど」と  
言いながら椅子の肘掛けを叩いてみせた。王たる者の行いとは到底思えないその仕草に、  
諫言の一つでもしてやろうかとアーヴェンが口を開きかけたその時、バレンはびたりとそ  
の笑いを消した。

「良いだろう。アーヴェン、お前にそこまで言わせるのだ、女帝に会って損はあるま  
い。しばしこの国を、お前に預ける」

「まさか、行くつもりか？」

瞠目するアーヴェンに対し、バレンは鼻を鳴らした。

「返答の使者を送るぐらいなら、俺が直接行った方が早い。向こうの提案でもあることだ  
し、文句はあるまい。それに、会って聞きたいことは山ほどある。スイを連れ去った理由  
ともに連れ帰った『銀の人形』のことも知りたい。俺達の知らない所で何かが起こり始め  
ているのだとすれば、女帝がそれを理解しているのは間違いない」

そこまで言ってバレンは再び手紙を手取る。

「時間に余裕があるとは限らんぞ、アーヴェン。『魔女』が動き出したのだ。その辺りに  
ついても狂王ならばきつと何かを掴んでいる」

「……『魔女』か」

二人の脳裏に、一人の女性の姿が浮かぶ。スイが攫われたその翌日、アルドヴァルド王  
国の使者として謁見を申し出た女。その不遜な態度は忘れがたいものであった。桃色の髪  
と丸い眼鏡、それに白衣を着た一人の使者——アンビー・ニユタル。

ヴェルデアア王国は新たな春を迎え、穏やかな季節であるにもかかわらず、その水面下  
の動きは慌ただしかった。

## 1 五年生

「いつてきまーすっ！」

王都ヴェルの北東部に位置する居住区の第二地区。

街の中央部を貫くように延びる大通りから、まっすぐ東へと進んだ先にある教会。その扉の内側から、快活な声が響き、ほぼ同時にドアが勢いよく開かれると、小柄な少女が飛び出してきた。

茶色いショートカットの髪を揺らし、くりつとした丸い瞳を爛々と輝かせている。まだ七つになったばかりの少女、チェミである。その細く小さな体躯は、真新しいヴェルディア魔法学園の白を基調とした制服に包まれ、頭の上には丸い帽子を載せていた。

教会の門の前に立つ少年を見つけると、チェミは小走りに駆け寄っていく。

「おまたせっ、スイ兄！」

「まだ時間もあるし、大丈夫だよ」

と答えたのは、チェミに比べれば年上ではあるものの、まだあどけなさの残る少年――

スイだった。

同じく白を基調にした制服に身を包み、銀色の髪はその一本ずつが銀糸のような輝きを放っていた。左眼は生来のまま深い青を宿しているが、右眼はかつてこの街の王立図書館で得た魔眼の影響によって金色に染まっている。整った顔立ちは中性的とも言えた。

落ち着いた声で優しく少女に語りかけるその様子は、十一歳というやんちゃ盛りの年齢には不釣り合いである感が拭えない。待ち合わせに遅れてやって来た年下の少女に悪態の一つくらいついても良いものだが、それをしないのが、スイである。

「行こっ！」

「ほら、そんなに慌てるって危ないよ」

そう注意しながら、優しく少女の手を引く。チェミはにやにやと笑みを浮かべてスイを見上げた。お調子者の元氣少女、といった印象そのもののチェミの笑顔に、スイもつい釣られて微笑んだ。

「学園にはもう慣れた？」

「んとねー、まだ迷子になりそー」

「あはは、広いからね」

「むうー、クリスだって迷子になるって言ってたもん」



笑われたのが悔しかったのか、口を尖らせたチェミは、同じく教会に住む自分と同年の少年を引き合いに出した。彼もチェミと同じく、今年から新入生として魔法学園に通い出している。

クリスは孤児である。まだ幼い頃、行商を営んでいた家族が盗賊に襲われて命を奪われ、クリスだけが生き残る形となってしまったのだ。幸いにもクリスは保護され、ヴェルの教会に預けられたが、心に刻まれたトラウマはそう簡単に癒えてくれない。今でも他人に対して過剰なまでの恐怖心を抱いてしまう。街の中をスイやチェミ、シスター達や神父であるエイトスなどと一緒に歩くぐらいならば特に問題はないのだが、集団行動を余儀なくされる学園での生活はどうにも難しいようだ。集団の中になると、クリスは人への恐怖から緊張し、身を強ばらせてしまう。

そういつた事情から、クリスは誰かに送り迎えしてもらいながら学園に通い、かつてのスイと同様に、午後からたった一人で授業に参加しているのだ。

スイにとっては血の繋がりにこそなくても、教会に暮らす子供達はみな家族も同然である。弟のようなクリスの事情を思うと、スイはつい深刻な顔になるが、チェミには悟らせまいと笑みを顔に貼り付けた。

「じゃあチェミがいろいろな所を見て、クリスに教えてあげると良いかもね」

「もうっ、しょうがないわねー。クリスつてばまだまだ子供なんだからー」

「……それ、誰の真似？」

「えっへっへ、イルシア姉の真似ー」

大人びた仕草をしてみせるチェミを見てスイが尋ねると、シスターの中でも最年長であり、皆の纏め役であるイルシアの名が返ってくる。なかなか堂に入ったので、スイも思わず噴き出しかけた。

男の子よりも女の子の方がおませで、大人ぶりたがるものだが、クリスに対してお姉さん風を吹かせるチェミの姿は、とにかく可愛らしい。

「それじゃあクリスのことはお願いします」

スイが下手に出ると、チェミは再びイルシアを真似て、小さく華奢な胸を張りつつ鷹揚に頷いてみせるのだった。

ヴェル北西部に広がる居住区——第一地区。そのほぼ全域を占めるのが、ヴェルディア魔法学園である。石造りの建物が三棟あり、その奥には広大な校庭が広がっている。

学園の敷地に足を踏み入れたスイは、チェミと別れ、左腕につけた生徒会腕章——転移用魔導具に右手で触れた。

魔導具まどうぐとはそもそも【施陣魔法せじんまほう】——つまり魔法陣が描かれた道具のことを指す。魔力さえ込めれば誰でもあつても自動的に魔法を発動させることができるので、『魔力を導く』という意味から『魔導具まどうぐ』と呼ばれている。スイの左腕の生徒会腕章は、有効範囲内——すなわち学園の敷地内ならば、どこにしようとして生徒会室へ転移させる役割を担っている。さつそく腕章に魔力を流し込むと、腕章の内部に刻まれた魔法陣が薄らと光を放つ。すると、スイの足元に白い光で描かれた円形の魔法陣が浮かび上がり、スイの視界を白く染めた。周囲に鳴り響いていた朝の喧騒けんそうが消え去る。光で目が眩くらまないように眼を閉じたスイは、瞼まぶたの向こう側を染め上げていた光が収束したことを悟ると、ゆつくりと瞼まぶたを開いた。するとそこに、いつもながら奇妙な光景が広がっていた。

人工の草原にゆるやかな風が吹き、空に輝くのは人工の太陽である。入り口から続く一本の小道は白い大理石によって造られ、アーチに囲まれている。速くに見える黒い壁から滝のように水が溢れ、流れる水の音が耳に心地好い。

五十メートルほど続く小道を歩いて行けば、生徒会役員のための会議スペースが円状に広がる。円卓を囲むように椅子が並べられ、その向こうには茶器の並べられた白塗りの棚が置かれていた。生徒会メンバーに選出された生徒たちはこの場所で仕事を進めるのだ。

魔導具まどうぐを使って築かれたこの場所は、七十年前に起きた『魔導戦争まどうせんそう』以前のもので、現

在では失われた技術によって構築されている。もしも今、これと同じ物を造れと言われたなら、誰もが首を左右に振り、不可能だと答えるだろう。

この場所が禁忌指定を受けて封印されなかったのは、危険性がないと認められたおかげだった。スイが初めてこの場を見た時、これほどまでに高度な建築技術があった『ヘリン』の時代には、一体どんな街が、どんな世界が広がっていたのか、と知的好奇心が疼うずいたものだった。

学園に生徒が集まるにはまだ早い時間だが、もう間もなく生徒会役員たちがやって来るだろう。そう考えながら、スイは自分の定位置——入り口に背を向ける席に鞆かばんを下ろした。「ファアラ、出て来ていいよ」

スイの呼びかけに呼応するかのようには、スイの眼前に召喚光が集い、人の形を成している。集まった光はやがて弾け、簡素な白いワンピース姿で金色の長い髪を揺らす二十代前半の女性、すなわちスイの（使い魔）である金龍——ファアラが現れた。

ファアラは身体を伸ばして大きく欠伸をすると、眠たげな赤い瞳をスイへと向けた。

「おはよう、主様あつかさま。今日は早いなだね」

「うん。お知らせがあるとかで、生徒会メンバーはメトレイア先生に呼ばれたんだ」

「お知らせ？ ふあああ……」

「あはは、眠そうだね。一応、重要な発表があるらしいんだけどね。だからいつもより早いんだ。まだ誰も来てないみたいだし、もう少し寝てる？」

スイの問いかけに、ファアラは「んー……」と考え込むような声を漏らした。そして、穏やかな風を受けて長い髪を揺らし、顔にかけられないようにと指で押さえながらスイを見つめると、そのまま両手を左右に広げ、おもむろにスイに抱きついた。

「わっ、と……。どうしたの？」

「んー、別にー」

最近は、こうして不意にファアラが抱きついてくることも珍しくはない。

ブレインル帝国の帝都ガザントールがある、リブテア大陸。そこで起こった『銀の人の形』の騒動以来、ファアラはようやくスイを『スイという一人の少年であり、自分の主である』と認めるようになった。それ以前は——かつての主マリステイスの生まれ変わりとしてしか見ようとしていなかったのだ。しかしファアラは、ブレインル帝国の黒髪黒眼の魔法使いであるユーリにその思い違いを指摘され、気付かされた。

召喚された当初は、スイを『マリステイスの代わり』として愛し、懐いていたのであったが、今は違う。主人と〈使い魔〉という立場をわきまえながらも、以前よりも親密になり、十分過ぎるほどの仲の良さを遺憾なく発揮している。

「仲良いわね、ホントに」

横合いから声がかかった。

ファアラに頭を抱えられたままスイが振り返る。そこには、スイの同級生である少女——シルヴィ・フェルトリートが立っていた。茶色い長い髪を左右で括った彼女の丸い瞳は、呆れを含んで細められていた。

四年生の頃はクラスが違ったスイとシルヴィであったが、五年生となった今は同じクラスで、最近は以前にも増して行動をともにすることが多い。そのため、こうしてファアラがスイにやたらとスキンシップを取りたがる光景をよく目の当たりにしているので、人一倍呆れてしまうようだ。

「おはよう、シルヴィさん」

「おはよー」

スイの挨拶と一緒に、ファアラもまたシルヴィに声を掛けた。

「おはよ。ブレインル帝国から帰って来てからというもの、ずいぶん仲がいいけど、何かあったの？」

「何かって？」

「だって、前はそんなにべったりじゃなかったでしょ？」



「んー、そうかな？」

ファラがスイにひつついているのは大して珍しいことではなかったが、ガザントールから帰ってきて以来、それが殊に顕著けんちやくになった。スイはそんな些細ささいな変化に気付いていないのか、シルヴィの指摘が何を意味するものなのかいまいち理解していないように首を傾かむげている。

細かいことを気にしないのは、鈍感どんかんと言うべきか、あるいは度量が大きいと言うべきか。いささか判断に困る、というのがシルヴィの本音である。さらに、もう一つ気になることがあった。

「そういえば、スイ。アナタのお姉さん——アーシャさん、だったかしら。やっぱり有名みたいよ」

「有名って？」

「銀色の髪に青い瞳、それにあんな整った容姿だもの。話題にもなるわよ」

「そうなんだ？ そんな話、本人からは何も聞かされてないけどなあ」

どうやら先ほどシルヴィが抱いた二択の疑問に対する答えは、「鈍感である」とするのが妥当のようだ。そうシルヴィは判断した。

ブレイル帝国から連れ帰った『銀の人形』は、現在はその名をアーシャと改め、この

ヴェルデア魔法学園の七年生として編入した。スイの生き別れた姉として、である。

彼女は教会で暮らしているのだが、最近スイも生徒会の集まりで朝が早いから登校は別々だった。チェミがスイと一緒に早い時間に登校するのは、学校が楽しいからであるが、スイに合わせているためでもある。

アーシヤは、夜は自室で調べ物をしているらしく、部屋に籠こもったまま出て来ない。スイも必要以上に構おうとはせず、たまたま顔を合わせたときに軽く言葉を交わすくらいである。

それでも春に行われた『光夜こうやの恋』のリメイク以降、アーシヤの態度も徐々に軟化なやしてきたようだった。チェミには「アーシヤ姉」と呼ばれて懐かれており、部屋で調べ物をしている最中にチェミが入っていても邪険じやくけんにすることはなく、スイも安心している。

しかし、心に巣くった陰が全て拭かれた訳ではない。時折アーシヤが浮かべる悲しげな表情はスイの脳裏に焼き付いていた。

「……姉なのには？」

「うん？ あ、うん。姉って言っても、向こうでアーシヤは一人ぼっちだったし、ついて来てもらっただけだから。ほら、あんまりずけずけと踏み込む訳にもいかない、から？」

「何で疑問形なのよ……」

シルヴィの鋭い指摘に苦笑を浮かべるスイであった。

シルヴィには、ガザントールで再会したスイの姉としてアーシヤを紹介している。数年前までは親と一緒に暮らしていたが、親が亡なくなってからはたった一人で生きていたのだ、と。

もちろん『銀の人形』である彼女に家族がいるはずはないのだが、銀髪蒼眼ぎんぱつそうがんという珍しい外見から、姉弟であるとした方が何かと言い訳をしやすい。そのため、実情を知っているアーヴェンと相談した上で、アーシヤをスイの姉ということにして、たった一人で生きていたのを連れ帰った、と周囲に説明しているのである。

そんな話をしている内に、生徒会のメンバー達がようやく登校してきたようで、二人の元に話し声が聞こえてきた。誤魔化ごまかすのも楽ではない、と言わんばかりにスイはそつため息を吐き、話を切り上げる。ファラはどうやらスキンシップに満足したらしく、すでに姿を消していた。

入り口から続々と入って来るメンバーと朝の挨拶を交わしていく。みな、自分の定位置である椅子に腰掛けた。

列の最後尾について入って来たのは生徒会顧問講師——メトレイア・シウーだった。彼

女の髪と瞳は相変わらず真っ黒であり、その点はユーリに似ているが、波打つ長い髪と切れ長の瞳から発せられる艶やかさは、まだあどけなさが残るユーリとは比較にならないほど色っぽかった。

部屋の最奥部で円卓についているのは、青い髪に紫の瞳、整った顔立ちが特徴的な生徒会会長、『魔術科』に所属する八年生のソフィア・シヴェイロだった。

スイから見てソフィアの右に座るのは、ヴェルデア王立図書館の司書でありヴェルデア王国軍に所属しているネイビス・ウォルスの娘——クレディア・ウォルス。ソフィアと同じく八年生で、魔術科を選択している。クレディアは、以前のヘアスタイルは長いポニーテールだったが、今はその茶色い髪が背中にかかる長さで切り揃えられている。

ソフィアの左隣には、六年生で『執務科』への所属が決まったナタリア・ルダリッド。丸いレンズの小さな眼鏡をかけ、他者を寄せ付けない空気を漂わせる少女だ。

クレディアの隣にシルヴィが座り、その隣——ちょうどソフィアの対面に座るのがスイである。

そんなスイの左隣には、紫の髪と瞳の少年、前髪を掻きあげながら自らの所属先である『騎士科』をやたらと強調したがるウエイン・クレイサスの姿があった。

ソフィアの隣に、顧問講師のメトレリアが立つ。

「——さて、今日皆さんにこうして早くから集まってもらった理由ですが」

メトレリアはそこできいたん言葉を区切り、円卓の周りを回ってプリントを一枚ずつ生徒に配っていく。スイは目の前に置かれたプリントを手に取り呟いた。

「……専攻科目の選択学年引き下げ……?」

「その通りです。皆さん、我がヴェルデア魔法学園がヴェルデア王国によって運営されていることはご存知だと思いますが、今回バレン国王陛下とカンデイス学園長の間で話が進み、今年度から急速に、五年生から専攻科目への参加を可能とすると決定されたのです」

スイの呟きにメトレリアが説明を始めた。

これまで専攻科目は六年生になつてはじめて選択可能であった。一般授業は午前中に行われ、午後になるとそれぞれの専攻科目の授業が始まるという形で進むのだが、専攻科目は大きく分けて二通りある。

一つは一般学科で、『商業科』『工業科』『研究科』『執務科』がこれに当たり、一般的な教養を培い、就職に有利な実務能力を学ぶ。

もう一つは戦闘学科で、『魔術科』と『騎士科』があり、実際の戦闘技術を養成する。

花型と目されるのは、やはり『魔術科』と『騎士科』の二つ——戦闘学科だ。ウエイン

が事ある毎に『騎士科』の名を強調したがつているのは、この花型グループに在籍しているから、という訳だ。

それぞれがプリントに目を通している最中、メトレイアが表情に陰を落としながら改めて口を開いた。

「昨年末の『光夜祭襲撃事件』に加え、昨今は周辺大陸に他国の侵攻が及んでいることから、我が王国のみならず他の国々でも軍事強化がなされているようなのです。しかし、現在のヴェルディア王国の戦力状況では、いざという時に対処しきれない恐れがある。そのように危惧されています。こうした経緯もあって、戦力増強を目的として、才能ある生徒を早い段階から発掘すべく、専攻科目の選択学年が引き下げられることになりました」

戦力増強目的というのは身も蓋もない事情ではあるが、生徒会メンバーから特に文句が上がることはなかった。

『光夜祭襲撃事件』の際、ここにいる生徒会メンバーは少なからず敵と直接対峙する状況に追い込まれたのだ。『魔術科』と『騎士科』に在籍しながら、彼らは手も足も出ないまま無力化された。その記憶がまざまざと蘇ったのか、ウェインとソフィアの二人は悔しさを噛み締めるように目をわずかに伏せた。

「元々、このヴェルディア魔法学園は教育のためだけではなく、軍事施設としての役割も

果たしてきました。あの『魔導戦争』から七十年、改めて軍事化していくように思えてしまいかもしれませんが、実際はそう大きな変化がある訳ではありません。また、今回からは同時に転科試験も行えるようになる予定です」

「転科試験、ですか？」

「そうです、クレディアさん。これまで専攻科に進んだ後に転科を希望する例もままありました。その対策として、今年からは毎年一度の転科試験を設け、それを機に専攻科の変更ができるようにと配慮されています。戦闘学科の試験に落ちて夢が破れた生徒も、再チャレンジすることができずし、また戦闘学科から一般学科への転科も可能になる、という訳ですね」

「ですが先生、戦闘学科の人数が減ってしまう可能性があるのでは？」

「いいえ、ナタリアさん。戦闘学科は確かに狭き門ですが、流れに身を任せて進んできた生徒が実力の伸び悩みに苦しむようでは、本人のためになりません。ならばいっそ、一般学科に転科したほうが実力を発揮できる場合もありますよ。それに、戦闘学科は人数さえ集めればいいという訳でもありませんしね」

ナタリアの質問は確かに鋭い指摘であったが、学園側としては、戦場に立つ覚悟がない生徒に無理強いしたくないというのが本音だろう。そうした学園の意思を汲み取ったのは、

やはり貴族の立場に身を置くソフィアとシルヴィイの二人で、事態の重みに思わずため息を吐いていた。

「他の生徒に発表するのは今日この後になりますが、スイ君、それにシルヴィイさん、あなた方二人の希望学科はもう決まっていますか？」

メトレイアの質問に、シルヴィイとスイは視線を交わす。

「私は『魔術科』志望です」

「スイ君は？」

「僕も『魔術科』に進みたいです」

「えっ」

「え？」

最初の「えっ」はウェインから発せられた驚きの表現で、スイは思わずウェインを振り返って、疑問符つきの「え？」を返した。

「ス、スイ。『魔術科』は女子生徒ばかりなんだぞ？ それにキミほどの魔法の実力があれば、むしろ剣技を体得して接近戦を窮めた方が良いんじゃないのか？」

予想外だと言わんばかりに詰め寄るウェインにスイの表情が引きつった。

「えっと、僕は別に剣技とかには興味ないですし、むしろ魔法の腕を上げた方が良いか

なってるんですけれど……」

確かにウェインの言い分は理解できる。接近戦の実力を上げるべきだと考えるのも特におかしい話ではない。

しかし、スイは魔法の扱いに関してまだまだ経験値が足りない。これはアーシャからも釘を刺されており、スイ自身も強く自覚していた。

帝都ガザントールのあるリプテア大陸で、アーシャに精神を乗っ取られて戦ったあの時の強さは、今のスイでは発揮できない。それはひとえに経験が足りないためだと、アーシャはスイに告げていたのだ。

「スイの魔力と魔法の特徴から考えると、『騎士科』は向いていないと思いますよ、ウェインさん」

シルヴィイがスイの意見を擁護する。ウェインが「どうしてだ!？」と反論すると、さらにシルヴィイは続ける。

「一つには、スイの魔力なら威力を重視した後方からの連射という方法が採れるんです。

それがスイの持ち味なので、至近距離で闘うなんて不利にしかありません。それに、スイは男子の中でも比較的背が低いほうですから、わざわざ接近戦で不利な戦い方をすることはないでしょう」



シルヴィの論には一理ある。が、自分の背の低さを理由の一つに挙げられたことについては、男子として反論したいスイである。

「ウエイン君、シルヴィさんの言う通りよ」

「で、ですがメトレイア先生！」

「もしかして、ウエイン君。アナタ、『騎士科』にスイ君を引きずり込んで自分の手柄にしようとしているんじゃない?」

「っ!? ……ち、違いますよ」

クレディアの冷静な指摘に慌てるウエインであったが、その視線は明後日の方へと向けられている。その姿に、その場にいた誰もが「ああ、やつぱり」と呆れたようなため息を漏らした。

とはいえ、最近ではウエインの『騎士科』自慢も鳴りを潜め、他の生徒に負けぬようにと、訓練に熱を入れて剣を振っているため、科での評価は上がりつつあるのだ。

そして、これは誰も知らぬところではあるが、あの『光夜祭』の夜、ブレイニル帝国の諜報部隊がスイを襲ったあのと、旧エウンシア王国出身の赤髪の女剣士——タータニア・ヘイルンの勇姿が、今もウエインの脳裏に焼き付いているのだ。

自分達が無力化されて動けぬ中、颯爽と現れて剣を振るってみせたあの少女。その姿に

ウエインは、己の驕りと弱さを思い知らされてしまった。だから少しばかり大人になろうとしているのである。

それでもスイを仲間にして、あわよくば自分の株を上げようとするあたりは何とも彼らしい。そんな彼の姑息な考えが生徒会メンバーの支持を得られないのは当然のことであつた。

「それで、メトレイア先生。私達の学科希望がどうしたんですか?」

「生徒会メンバーの選考学科の希望はなるべく早く提出して欲しいと要望が出ているのです。生徒会の生徒は基本的に優秀でしょう? 一般学科を選ぶなら特に問題ないのですが、戦闘学科に進みたいなら、定員数に上限があるので、別枠を設けなくてはならないのです」

「でも僕らも試験を受けるんですよ?」

「ええ、もちろんです。……まあスイ君に関しては、必要ないと思いますけどね……」

メトレイアの小さな呟きは全員の耳にしっかりと届いていたようだ。生徒会メンバーの視線がスイに集まり、「ああ……」と何やら納得した様子で頷いている。当の本人は試験にやる気を燃やしているのか、周囲の反応に気付いていないようであつたが。

「本当に『魔術科』に入るつもり？」

生徒会室を後にしたスイとシルヴィが二人並んで教室へと向かう途中、シルヴィが念を押した。

「どうしたの？」

「だって、スイが魔法の勉強をしたいって言っても、正直なところスイの魔力とか実力とか、そういうのを考えたら、『魔術科』に入ってもあまり意味があるとは思えないもの」

これはシルヴィの本音であった。何せ彼女は、生徒会室の奥で行われているスイとその〈使い魔〉であるファラとの魔法の応酬おしりょうを見ているのだ。すでにスイは『魔術科』の誰よりも強い、とまではいかずとも、『魔術科』に入ってもプラスになるとは到底思えなかったのだ。

「そ、そんなことないと思うよ？ シルヴィさんだって『魔術科』に入るんでしょ？」

「入るから聞いているんじゃない。あ、別にスイが入るのが嫌って訳じゃないのよ。ただ、ほら。もともとそんなに実力とかに固執こしつするようなタイプじゃなかったのに、ちよつと意外だなーって思っただけ」

シルヴィが慌てた様子で答えた。

スイはこれまで、自分の実力を鼻にかけて他者を見下したことはない。それはある意味

では、年齢に不相応ふさうおうな大人びた態度だ。だからシルヴィはてつきり、スイはそもそも魔法の実力などには興味がないのかと思っていたのである。

そんなスイが『魔術科』に入ってしまったら、何かが変わってしまうのではないだろうか。有り得ないとも思えるが、スイとてまだ子供であり、自分の実力に陶醉とうずいしてしまうのではないかと懸念がシルヴィにはわすかばかり芽生めはえていた。その悪あくしき具体例が、生徒会メンバーの一員に見られるのだ。シルヴィはそれを意識して言った訳ではなかったが。

「……もしかして、ブレインル帝国で何かあったの？」

「……うん、ちよつとね。やらなきゃいけないことがあるんだ」

それは、マリステイスと約束した『宝玉』の回収だった。そして、ガザントールの地下でアイルタに告げられた、何者かの魔手まても気にかかる。それらを思い浮かべて、スイは苦しい表情になる。その横顔を見ながら、シルヴィは自分の胸元で小さな手をきゅつと握り締めた。

——いつか、スイはどこか遠くへ行ってしまうんじゃないだろうか。

アーシャという姉の登場も、偶然の出来事ではない……。シルヴィは嫌な予感を胸に抱きながら、スイの横顔をじつと見つめていた。

## 2 戦闘学科

ヴェルディア魔法学園、スイの通う五年C組の教室。

午前中の授業が終わり、窓際に座っていたスイとシルヴィは、教室内に充満する生徒達の喋り声しゃべりこゑと熱気を感じていた。

「類を紅潮ほしこさせながら嬉しそうに語らう生徒達。何をそんなに喜んでいるのかといえば、今年もこのクラスの担任となった『歴史学』担当の講師であるメルニア・オリンの口から、専攻学科に五年生も参加可能となった旨よねの発表が行われたためである。

楽しみにしていた専攻学科が、一年も早く体験できるというこの状況に心を躍らせた生徒達は歓声をあげ、その興奮冷めやらぬ中、友達同士、何科に進むのかと尋ね合っている。

「こうして見ると、やっぱり専攻学科への期待って大きいんだね」

「何を他人事ひとことみたいに言ってるのよ。そんなの当然じゃない」

「当然？」

「専攻学科の授業は直接将来に結びつくし、それこそがヴェルディア魔法学園の醍醐味だいごみと

言っても過言じゃないわ。それを一年も早く学べるようになったなんて、私達の学年は恵まれていると思うわ」

ヴェルディア魔法学園の専攻学科は直接将来に役立つ。そういった意味では、ただダラダラと授業をこなす日々よりも、遥かにやり甲斐がある訳だ。

「でも、その代わり、上級生に羨うらやましがられるでしょうけどね」

「一年も早く入るのはズルって思われたりするのかな」

「まあ、内心ではそういった感情もあるでしょうけど、女子の方はさほど問題はないでしょうね。……サークル内でしっかり統治されてるし」

ポソツと最後に呟つぶやいたシルヴィの声はスイには届かないほどの小さなものであった。

午後からは各科の説明会が行われる予定だ。この休み時間の内に、どの科の説明会に参加するか決めておくようにとメルニアに言われた生徒達はそれぞれにプランを検討し合っている。説明会は今日から三日間に亘わたって行われる予定だそうで、それぞれ午後には二回ずつ開かれる。その気になれば全科の説明会を巡れるように配慮されているのである。

今朝の段階でその発表を聞かされていたスイとシルヴィは驚きもせず、自分の進路についてもハッキリと定まっているため、周囲の熱に当てられることはない。

「そういえばシルヴィさん、『魔術科』なんだね」

「ええ。意外だった？」  
 「うん、ちよつとね。侯爵家を継ぐための勉強をするのかと思つてただけど、そうじゃないんだね」

シルヴィはフェルトリート侯爵家の唯一の令嬢であり、兄弟姉妹はいない。侯爵の地位を継ぐのはシルヴィであり、そうなれば間違いなく国の内政に関わる実務に追われることだろう。などと考えていたスイに、シルヴィが意外なことを言った。

「内政とか、そういう専門的なことは文官に任せるつもりだもの。一応家庭教師の先生に教わつてはいるけれど。それより侯爵家の令嬢として箔を付ける必要があるわ。ヴェルデア魔法学園の『魔術科』と『騎士科』のブランド力が大事つてことよ」

「ブランド力？」

「ええ。ヴェルデア王国において、貴族は庶民に歩み寄つてはいるけれど、それでも『魔術科』や『騎士科』から輩出されたとなれば、名前にブランドの箔がつくの。そういう意味では私も、それにソフィアさんも『魔術科』を選ぶ必要があるという訳」

「……ふーん……？ 僕は庶民だし、別に気にする必要はないと思うけど」

「まあ、スイの場合は、何か偉業を達成すればすぐに貴族になりそうだけど、ね」

「貴族に？ 僕が？」

予想だしていなかったシルヴィの一言にスイは目を剥いた。

「だって、スイの魔力とファラの実力を考えたら、国は保有しておきたがるでしょう、普通」

「いやいや、そもそも孤児の僕にそんな話が来るかな」

「関係ないわ。幸い、バレン陛下はそういつた出自にこだわる人じゃないし、まあいずれはそういうこともあるかもしれないって思つておくと良いんじゃないかしら」

「……いずれ、ねえ……。あまり僕には関係なさそうな気がするけどなあ」

いずれも何も、大人になる頃には、マリステイスと交わした約束を果たすべく、このヴェルデア王国を出ることになる。そんな自分が貴族になるなど、ほぼ有り得ないだろう。そう漠然と未来を思い浮かべるスイであつた。

周囲の熱気とはかけ離れたクールな会話をしている二人のもとへ、メルニアが歩み寄つてきた。

「スイ君とシルヴィさんの希望はもう聞いてるわ。『対魔術学』の担当講師のキャスリア先生が『魔術科』の専門講師よ」

キャスリア・オネット。茶色く短い髪を切り揃えた、凛々しい女性講師であり、スイも『対魔術学』の授業では世話になつている。スイに家名がないということに何故か憐憫と

同情の視線を向けてはいるが、スイは気にしていなかった。

「キヤスリア先生は厳しいから、頑張ってるね！ まあスイ君とシルヴィさんは優等生さんだから、そんなに心配いらないと思うけどね」

「優等生なのはシルヴィさんですね。僕は無断欠席が多いです」

「あはは……確かに無断欠席は多いかもね……。で、でも、ほら。事情とかもあるんだし、ね……？」

タータニアに連れられて（放棄された島）へ行った昨年の夏、それにブレイニル帝国軍に拉致される形となった冬、それらのことを考えれば、スイの出席日数が誰よりも少ないのは無理からぬことであった。

自虐めいたことを口にするスイに何とかフォローを入れようと試みたメルアだったが、上手くいかず結局、苦笑いを浮かべてその場を去っていくのであった。

「ん、シルヴィさん、どうしたの？」

「……うん、ちょっと。去年の夏のこととは私のせいだったから、何も言えないなあって」

「あ……、気にしないでいいよ。いろいろとためになったのは事実だから」

まさかシルヴィがそんなふうに感じていたとは……。思いも寄らなかったスイである。タータニアによってスイが扱われた件は、そもそもシルヴィが攫われたことに起因し

ている。その点を考えると、先の自虐発言はシルヴィの前ではどうやらタブーに分類されるようだ。

昼食を終えたスイは、シルヴィとともにさっそく『魔術科』の説明会へと向かった。

説明会が行われる教室内にはすでに多くの生徒がいるが、やはり女子率が相当高い。それはこの場に限ったことではなく、国中どこへ行っても男女の比率は女性の方が多いのだが、魔術科の説明会に特に女子が多く集まっているのは、女性の方が男性よりも魔法量に恵まれていることにもよるのだろう。

また、『魔術科』ともなれば魔法量が成績に直結しやすいことに加えて、男子生徒は『騎士科』への進学を考える傾向があるため、男女差が顕著に表れているようだ。

教室の一角に男子生徒が八名ほど集まり、あとはずらりと女子ばかりが並んでいる。

「僕も向こう側に座った方が良いのかな？」

「別に気にしなくていいんじゃない？」

シルヴィはあっけらかんと言ってくれたが、いくら鈍感なスイといえども、教室中の視線が集まる中、女子に交ざって座るなど、針の筵しじょうも良いところである。

「……いや、うん。向こうに行くよ」